

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6月26日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2012

課題番号：22520042

研究課題名（和文） 台湾・東南中国における靈宝儀礼の基礎的研究

研究課題名（英文） A Preliminary Study on Lingbao Liturgy in Taiwan and Southeast China

研究代表者

丸山 宏 (MARUYAMA HIROSHI)

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：00229626

研究成果の概要（和文）：道教という宗教が『度人経』をはじめとする『靈宝経』の教理を、いかに儀礼実践の中に応用しているかを、台湾、福建、浙江の儀礼資料を利用することによって解明した。靈宝儀礼に特有の歩虚詞の歌唱が規範の通りに行われるかを指標に各地の資料を検討した。また大英図書館所蔵の福建海澄の道教儀礼手抄本により、台南と海澄の儀礼を比較し、地方社会と儀礼の関係、儀礼の種類の違いを解明するとともに、誦経の音声の資料化を試みた。

研究成果の概要（英文）：This research project investigates how Daoist liturgy applies and expresses religious doctrines contained in Lingbao(Numinous Treasure)canons such as Duren jing(Universal Salvation Sutra) etc.by broadly examining liturgical texts of Taiwan and Southeast China. To check whether the typical Lingbao mark such as singing Pacing the Void Hymn in due places or not is important for this project. I have read and compared British Library's Haicheng manuscripts with Tainan manuscripts and explained problems concerning with local society and liturgy, difference and sameness of two areas traditions. This project has tried to collect pronunciation data of Linbao sutra recitation by Taiwanese priest.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、中国哲学

キーワード：道教

1. 研究開始当初の背景

(1)本研究は、道教儀礼の伝統の中で、六朝時代に成立した『靈宝経』、特に『度人経』（『太上洞玄靈宝無量度人上品妙経』とも称する。以下において『度人経』と略称する）に説かれる教説に基づき、宋代以降、現代に到るまで

儀礼伝統として大きな体系を具備して発展した靈宝儀礼を研究対象とする。本研究の背景として最も基本的なことは、靈宝儀礼の伝統が、『靈宝経』を儀礼に応用することによって、儀礼内容の豊かさをもち得たことの重要性を強く認識することから発する問題意識である。

(2)本研究が想定する靈宝儀礼の多様な内容には以下のものが含まれ、いずれも道教という宗教の儀礼実践において枢要であるが、それら多くの要素の解明の程度について言えば、現状は必ずしも十分ではないという問題意識がある。天や帝の諱、魔王の歌、歩虚の詞などの歌唱の表現、生氣からなる真文の配置による世界の安鎮、身体神の存思による養生、死者救済の過程の完備、戒律道德の主張、儀礼文書の操作、修齋と誦経による救済の種類の多様化と救済対象の普遍化、次世代の弟子の組み入れとしての伝度の制度の重視などといった多様な要素である。本研究はこれら一つ一つの儀礼要素の解明が道教研究に大きく貢献するという前提で行われている。

(3)研究史の点から言えば、六朝の靈宝儀礼の原型について K.Schipper の先駆的成果があり、五方真文の操作とその意義について解明され、また六朝道教儀礼史における『靈宝経』の誦経の意義は、山田利明の成果がある。さらに近年では隋までの靈宝儀礼の展開を呂鵬志が儀礼類型学的に整理している。宋代以降について福井康順は『度人経』経典史として論述し、また M.Strickmann は北宋末の道教運動史の中で『度人経』の意義を解明している。しかし儀礼文献との関係や現代に到る儀礼伝統の文脈では考察が十分になされているとは言いがたい。本研究は儀礼伝統として『靈宝経』の応用の展開をより一層留意していく必要性から研究を進めていくことを考えて研究計画を出発させている。

(4)研究を開始する当初における、研究代表者である私自身の関連課題の研究の進捗状況から言えば、すでに台湾の台南の道教儀礼について儀礼文書を中心に総合的に分析し、符命や文書に『靈宝経』の理論が応用されている事例を解明してきていた。それらの特徴の一部は、台湾だけでなく、福建南部はもとより、浙江などの東南中国の道教儀礼資料との比較によって、一層広い範囲で通用する特徴であると気付き始めていた。また台湾の道教儀礼研究における現地の道士の『度人経』をはじめとする『靈宝経』の誦経の実際の方法を研究の俎上に登らせるため資料化することの必要を意識し始めるという段階に到っていたことも重要である。

2. 研究の目的

(1)六朝の『度人経』をはじめとする『靈宝経』が宋代以降、現代に到る靈宝儀礼の伝統の中で如何に儀礼実践に結びつけて応用されているかを解明する。

(2)南宋において浙江地方は道教儀礼の複雑化と革新化に重要な役割を果たしており、現在の浙江の靈宝儀礼の資料の特徴を、徐宏図の編修した科儀本から、台湾の台南との比較の中で解明する。

(3)儀礼研究の水準を、台湾の道士が実際に実践しているあり方に対して、より一層近接するため、教会ローマ字表記により、声調の変調まで把握できるように、『度人経』などの経典誦経の実態を資料化し、分析データの基礎をつくる。

(4)台湾南部、特に台南の靈宝儀礼の伝統について、従来、中国の福建南部の海澄地方の伝統と詳細に比較した研究がなかったので、イギリスの大英図書館所蔵の清末の海澄の道教儀礼手抄本(Or. 12693)を体系的に解読し、台南の場合と比較し、その異同を解明する。

3. 研究の方法

(1)宋代から現代に到る中国近世以降の靈宝儀礼の伝統を六朝の『靈宝経』の経文を儀礼実践に応用する側面から把握しなおすことを目標にし、特に南宋において成立した金允中および王契真の『上清靈宝大法』、蒋叔輿の『無上黄籙大齋立成儀』等において古い『靈宝経』が科儀書の中でどのように使われているかに留意して解読を進め、現代の儀礼資料を解読するための指針とする。そこで得られた知見は、以下の研究の中でも援用していく。可能であれば訳注を作り発表する準備を行っていく。

(2)現代の東南中国の中でも浙江地方の靈宝儀礼に着目して、徐宏図の集成した科儀本の資料を解読し、特に台南の靈宝儀礼の伝統と比較するという視座からその特徴を読み解く。

(3)研究期間中において、従来より教示を得ている台湾高雄の靈宝道士である杜永昌道長を複数回にわたり訪問し、『度人経』の閩南語による誦経の音声資料化に協力を仰ぎ、教会ローマ字により声調の変調まで記録する形の資料化を試みる。

(4)台南道教と最も密接な関係にあると考えられる福建省海澄県の靈宝儀礼の手抄本が大英図書館に所蔵されているので、それを閲覧筆写し、体系的に解読したうえで、台南の靈宝儀礼と比較することにより、双方の特徴を浮かび上がらせることを行う。

4. 研究成果

(1)本研究では、『度人経』をはじめとする古い『靈宝経』の中の表現が、台湾・東南中国に現在まで伝えられた科儀書において如何に運用されているかを検討した。その際に、大淵忍爾、1983、『中国人の宗教儀礼』、福武書店に録文された台南の靈宝儀礼の科儀書、大英図書館所蔵の清末福建海澄県の道教科儀書(Or. 12693)、福建以外の事例として徐宏図、1999、『浙江省磐安县樹德堂道壇科儀本彙編』、台北、新文豊出版有限公司に集成された科儀書を利用した。

まず注目したのは、台南道教の高位の神に謁見する主要な儀礼である朝科であり、早朝、午朝、晩朝のいわゆる三朝の科儀において、道蔵所収の六朝の古い『靈宝経』の一つである『洞玄靈宝玉京山歩虚経』の3-5頁に見える歩虚十首の歌詞が、以下に示すように早朝は第一首から第三首まで、午朝は第四首から第六首まで、晩朝は第七首から最後の第十首までというように全面的に引用され歌唱される点である。いずれも懺悔の後、三稽首の前に位置し、独立した歩虚遶壇という儀礼項目で唱われ科儀書に書き込まれている。

歩虚詞の第一首から第三首、第四首から第六首、第七首から第十首は、『金籙早朝科儀全集』、『金籙午朝科儀全集』、『金籙晩朝科儀全集』にあり、大淵、1983によれば、それぞれ307頁、319頁、330頁に確認できる。海澄の靈宝儀礼の三朝の科儀書も基本的に台南と同じであり、Or. 12693、『金籙早朝関奏科儀』、『金籙午朝関奏科儀』、『金籙晩朝関奏科儀』にあり、それぞれ(29)31-32頁、(30)28-30頁、(31)28-30頁に確認できる。

本研究の新しい成果として、徐宏図によって集成され利用可能になった清末宣統3年1911年の紀年のある浙江省磐安县の道壇の三朝の科儀書にも、上述の歩虚詞が確認できる。それは例えば『清早朝』、『清午朝』、『清晩朝』のそれぞれ366-367頁、389頁、396頁に歩虚が示されることによる。午朝と晩朝では歩虚という二字のみの提示にすぎないが、早朝の科儀書では三啓礼と関連させて歩虚の第一首から第三首が引用されることは注目できる。さらに重要なのは、磐安县の早朝の科儀書本文の歩虚の前後の懺悔文や上謝の文を台南、海澄と比較すると三者はほぼ同一内容であることがわかる。これは台南の道教を孤立させて理解するのではなく、福建や浙江といった東南中国の靈宝儀礼との共通性から個別的な地域を越えた分布の理解に道筋をつけることに繋がると考えられる。

また歩虚十首を朝科の中ですべて歌い尽くすという靈宝儀礼の方式は、六朝の『上元金籙簡文真仙品』に起源するもので、隋唐を経て伝えられ、北宋末の道教音楽資料『玉音

法事』の巻下、27頁には、早朝なら早朝という一つの朝科の中で十首すべてを唱いきるのか、あるいは一日の中の三朝に、例えば早朝は第四首まで、午朝は第四首から第七首まで、晩朝は第八首から最後までというように割り振るのか、いずれかの方式によればよいという規範が示されている。南宋の蒋叔輿『無上黄籙大齋立成儀』等もこの方式を採っている。現在にまで伝わる台南、海澄、磐安の靈宝儀礼ではこうした規範にほぼ依拠した方式を伝えていると言える。

朝科に歩虚を配置し重視する方式は、例えば『莊林統道蔵』第24冊・第25冊所収の台湾北部の三朝の科儀書を確認する限り、福建の詔安から由来するという台湾北部の道教の朝科の伝統には見られない。よって台南などではこの靈宝儀礼の規範がよく遵守されていると解釈することができる。上述の成果により靈宝儀礼の東南中国における分布のあり方について、今後より一層広い歴史的地理的な視野で解明するために有効な視座が得られた。

(2)本研究の成果の発表として最も主要なものは、主な発表論文等の学会発表①に記した大英図書館所蔵福建漳州海澄県道教科儀手抄本(Or.12693)初探であり、欧米、台湾、香港、中国の道教儀礼の専門家の前で中国語により報告と討論を行った。研究史の面から言えば、この手抄本は、歴史学者によりその内に記された地名、港名の歴史地理学的な観点からの部分的利用や、道教研究者により内に存在する限られた一つの科儀書の手抄本のみについての言及がなされるにとどまり、複数からなる手抄本の全体の体系を見通し、台南の道教と比較する視点に留意して詳細に探究されたことがなかったため、本研究はそこに重点を置いて内容分析につとめた。以下に解明し得た要点を提示する。

①手抄本から判明する福建漳州海澄県の科儀書の目録、時代と地域、道士の系譜。

Or. 12693は、合計で35種類の手抄本からなっている。もっとも古い本は康熙28年1689年の本であり、最も新しいのは同治10年1870年の本である。特に1820年代および1840年代の本が、それぞれ5本、6本ずつあり最も多い年代に属する。手抄本に記名のある道士としては、1840年代すなわち清末道光20年代に海澄県の白水鎮に近い金豊保に道壇を有し、太上三五都功の職位にあった陳法興が挙げられ、彼の活動が再現できる資料が多い。1850年代にはその息子である陳超然が父のために薦祖の手抄本を作成している。手抄本が示すこの地域の道教儀礼の種類は、科儀の部分は宿啓、早朝、午朝、晩朝、正醮といっ

た霊宝儀礼の根幹がすべて整っているが、いずれも生者の安泰を願う祈安の清法に属するものであり、死者を地獄から救う功德の幽法は含まれないことが判明した。このほかに沿海地方で必須の疫病神である王爺を送り出す儀礼や商船の航海安全を祈る儀礼の種類、各種の厄をはらう種類が含まれる。儀礼の際に公示される儀礼の主旨とプログラムを示す儀礼文書の写しが残されていることは儀礼活動の個別事例の情報を得られるので貴重である。

②手抄本に反映された清末海澄県地方の社会情勢と儀礼挙行の関係。

手抄本に含まれる『安船酌献科儀』の内容は、海澄地方にとって海上交易に従事する商人がこの地方の主要な経済活動となっていることを反映し、商船の安全をもつば祈願する内容である。これを台南の海に関する儀礼が漁船の安全と水死者の救済を幽法の一環として位置づけるのと比較すると、大きな差異があることがわかる。また正確な時期が不詳だが、石龍宮という廟で 1840 年代に行われた五日間の規模の儀礼の経緯と資金提供者の名簿を見ると、まずこの儀礼が少し前に社会の動乱があり、人心が不安に陥ったが、神に祈った結果、神が地域社会を守ってくれたので感謝のために儀礼を行うと記している。1840 年代の海澄の地方社会の最大の不安を醸成した事件とは、1842 年のイギリス艦船の海澄地方海岸への接近であったことは、当時現地を視察した官僚である張集馨の残した記事からもわかる。また儀礼の資金提供者の名簿に商人たちのみでなく現地の武職の官が記されており、官民をあげての地域社会の安泰にかかわる大規模儀礼において霊宝儀礼を担う道士が雇用され役割を果たしたことを知り得る。

③安籙と出官の儀礼から見る霊宝儀礼の伝統。

海澄の道教においては、台南の道教に見出しにくい、しかし重要な事が見出せる。その例として、道士に付き従う神霊およびその名簿である録の取り扱いがあげられる。例えば手抄本『安録科儀』は道士が神々の名簿である録を受け取った後に、自宅の道壇に配する儀礼内容を表現するが、同じものは台南には存在しない。また海澄の手抄本『金録拝発文科儀』の 21 頁以下には、祈願の文書を天に届けるために道士が体内の神を外に呼び出す出官の儀礼項目が記載されており、しかもその神々は、丸山宏、2004、「道教儀礼の出官啓事に関する諸問題」、『中国思想における身体・自然・信仰 一坂出祥伸先生退休記念

論集』所収、東方書店、449-456 頁に考証したように、天師道型ではなく霊宝型の改変が加わった出官の仕方になっている。この拝表の出官部分は、台南の場合には省略されていて、これまで復元できない状態であった。

④海澄県の霊宝儀礼に功德が存在しないことの問題性。

もし台南の道教が、海澄の道教を淵源とするならば、祈安の清法だけについて言えば、科儀内容が同一であるから問題ない。しかし海澄には功德のレパートリーが存在しない一方で、台南には清法のほかに功德の複雑な伝統があり、しかも台南の道士たちの日常的な儀礼活動の収入は功德の報酬となっている。このことから考えると、台南の道教の清法の部分は海澄から来たとしても、功德はいったいどこから持ち込まれ、いつ誰によりどのように儀礼のレパートリーとなって現在のようにならせたのであろうかという問題が浮上する。実はこの問題は、従来は台南の道教のあり方を孤立的に見ていたために考慮されることはなかったが、海澄の事例を知ることにより台南の道教の成立には根本的に未解明の部分があることが認識されるようになったのであり、今後、台南の道教を孤立的にとらえず、一層詳しく広く福建および浙江の道教との関係の視野でとらえる研究段階に入ったということを提起できる。

(3)『度人経』の閩南語による誦経の音声資料化について、現在まだ完成していないが、台湾高雄の杜永昌道長により提供いただいた誦経音声の録音資料を利用し、それにもとづき、経文の文字ごとの教会ローマ字方式の発音表記、声調と変調の記録を作製し、部分的に完成させた。どのような資料であるか示すため『度人経』の経題と経文の冒頭のみ以下に例示する。

ローマ字の後に原調と変調を声調番号で示す。原調と変調の間に斜線を入れる。数字が一つであれば変調しないことを示す。

太	上	洞	玄
thai3/2	siong7	tong7/3	hian5
靈	宝	无	量
leng5/7	po2	bu5/7	liang7
度	人	上	品
to・7/3	jin5	siong7/3	phin2
妙	経		
biau7/3	kengl		
道	言	昔	於
to7	gian5	sek4/2	u5
始	青	天	中
si2/1	chheng1/7	thian1/7	tiongl

この資料化に際しては、録音資料に対して、W. Campbell, 1913、『廈門音新字典』、台湾教会公報社、沈富進、1954、『彙音宝鑑』、文芸学社に依拠し字音の確認をしている。また現段階では、熟語と見なし得る場合は、意味の切れる最後の音節の一つ前の音節までは変調させ、最後の音節では原調を保つ傾向が強いこと、文語用の発音が選択されていることが指摘できる。従来の道教研究では、実際の誦経の音声面の探究や記録保存が遅れており、台湾の学者も含めてこの方面の研究は十分ではなかったことから、今後も資料化を継続させていくに値すると考えている。

(4)本研究に関連する成果として、主な発表論文等の項目に主要な成果を記している。そのうち雑誌論文の①は、台南の道教儀礼空間に設置される神画について、靈宝儀礼における道士による神々の姿の想像の技法と関連させて論じている。図書の①は、現代の台南と高雄および明代の浙江における事例から、道士の職位の神による承認の儀式について、儀礼文書の内容を解明し、文書表現にも靈宝儀礼の独自性が見えることを論じている。図書の②は、台南道教の死者儀礼の中で、かつて行われていた道士による功德芝居の科白の資料を解説し、道教的な特徴を仏教と比較して明らかにしたものである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

① 丸山宏、道壇と神画、アジア遊学、査読無、第 133 号、2011、132-146

[学会発表] (計 2 件)

① 丸山宏、大英図書館所蔵福建漳州海澄県道教科儀手抄本(Or.12693)初探、正一与地方道教儀式研究会、2012年9月22日、金門大学閩南文化研究所(台湾金門県)

② 丸山宏、王氏大法之会簡介、第1回中日宗教文化論壇、2010年12月11日、華僑大学(中華人民共和國廈門市)

[図書] (計 2 件)

① 丸山宏、道教伝度奏職儀式比較研究 — 以台湾南部的奏職文檢为中心 —、譚偉倫(編)、中国地方宗教儀式比較研究、香港中文大学崇基学院宗教与中国社会研究中心、2011、(637-657)

② 丸山宏、台南道教の奈何橋全論、林雅彦、

小池淳一(編)、唱道文化の比較研究、岩田書院、2011、(311-342)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

丸山 宏 (MARUYAMA HIROSHI)

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：00229626